

## 系統地理学的内容で地理Aの理解を深める ー工業立地を知っておこうー

高知県立梶原高等学校 藤澤 誉文

## 1. はじめに

地理Aの授業はどのような切り口から授業を始めるのか、また、世界の諸地域の地域性や諸問題に関してどのレベルの分析までさせるのか。内容を深めようとすればいくらでも深められるが、2単位という時数の規定上、内容の精選を必ず迫られる。この部分が非常に悩ましい科目であり、この悩ましきこそが、地理Aのおもしろさであり、難しさなのであると思われる。

現行指導要領下での地理Aの教科書では、内容の構成から、知識の側面よりも、世界各地の地域性をどのようにとらえさせるか、世界の諸問題をどのように分析し、解決させるかの側面を重視していることが読みとれる。しかし、このような構成の教科書で学習する場合、次のような授業に陥ってしまう可能性がある。

- 作業的・体験的な学習の側面を重視しすぎて、肝心の地域性の内容が疎かになってしまう授業。
- 資料をていねいに読みとることができず、そのために得られる知識が表面的な地域性のレベルに終わってしまう授業。

たとえば、『高等学校 新地理A 初訂版』（以下、教科書）「東南アジアの生活・文化」の「③工業の発展とASEAN」p.98では、第二次世界大戦後の特定の農産物や鉱産資源に依存するモノカルチャー経済を脱却するために、安い人件費や安い工業用地を利用した組み立て工業が発達してきたことを、タイやマレーシアの輸出品目の変化や、輸出額の変化のグラフから読みとらせるようになっている。また、現在の東南アジアと東アジアのつながりや労働力依存型の工業に関しては、教科書p.39の1台のパーソナルコンピュータができるまで（図1）や、『図説地理資料 世界の諸地域 NOW 2010』のp.68、69の諸所の図や写真からも読みとらせることができる。

しかし、この知識で東南アジアの地域性がすべてわかったといえるのであろうか。たとえば、このような

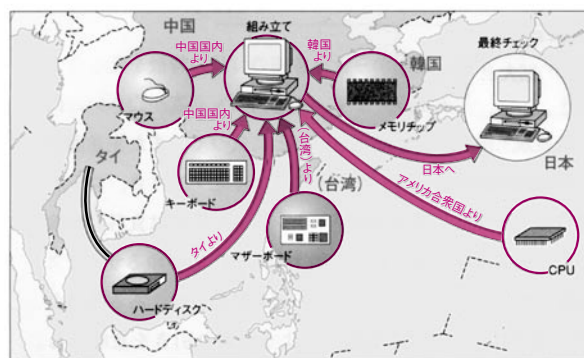


図1 1台のパーソナルコンピュータができるまで  
『高等学校 新地理A 初訂版』p.39

東アジアを含めた分業体制に組み込まれた組み立て工業が、なぜこの東南アジアで形成されたのか、もっと他の工業が発達する可能性はなかったのか、EUも同様の分業体制が形成されているのではないのか、EUとどう違うのかなどの疑問に答えられなければ、東南アジアの固有性、独自性の全体像というものは明確に見えてきにくいのではないだろうか。

新学習指導要領では、地域の歴史的背景や他科目との関連性ということを重視している。このASEANの工業化であれば、東南アジアの第二次世界大戦後の独立→開発独裁→民主化という一連の歴史的な流れの中で、工業の業種が輸入指向型工業から輸出指向型工業に変化してきたこと（政治・経済的内容）や、ASEANの輸出指向型工業の立地は、労働力指向型で交通指向（臨海）型の工業立地になる（地理Bの系統地理学的内容）という知識を習得することができたならば、東南アジアの固有性、独自性が明らかになるのではないだろうか。

## 2. 地理Aで工業立地を考える

私は、地理Aの授業をする中で、生徒が学習する世界史や政治・経済との関連性を持たせることや、気候、工業立地論、中心地論など地理Bで学習する系統地理学的内容を必要に応じて取り入れることで、世界の地域性の理解や諸問題の分析を深めるようにしている。

とくに本稿では、世界の各地域の工業についての学習を深めるための工業立地論の授業について紹介したい。

教科書p.122の「7 アメリカ合衆国の生活・文化」 「③ 先端技術産業の発展と工業の変化」では、先端技術産業、サンベルトやシリコンヴァレーという語句がゴシックで記述されており、アメリカ合衆国の工業が重化学工業中心のスノーベルトから先端技術産業中心のサンベルトにシフトしていること、さらに安い労働力を求めて、企業が海外進出をしていったために、産業の空洞化も起こっていることを理解させるようになっている。ひいては、このことがインドや中国の急成長と大きく関連している。

上述の東南アジアにしても、アメリカ合衆国にしても、工業立地論を理解しておく、授業の効率化にもつながるし、生徒の理解も深化する。このようなことから、私は、教科書の第1部の部分で、工業立地論の授業を2時間程度の投げ入れで行っている。

### 3. なぜスペースワールドは北九州にあるのか

この授業の目的は、工業には業種によって立地の特徴があることを理解させると共に、工業の立地にはその工業が立地する国の経済段階に応じて、流行があることを理解させ、世界各地域の工業についての見方・考え方を習得させることである。

まず、授業の最初にスペースワールドのタイタンやヴィーナスの写真を見せ、この写真(写真1)がどこの遊園地の写真であるか発問する。本県の生徒であれば、全員がわかるわけではないが、クラスの中のだれかは知っている。その後、地図で場所を確認させ、北九州工業地域にあることに気づかせる。

ここで、どの生徒も一度は見たことがある、官営八

幡製鉄所の火入れ式の写真(写真2)を見せ、この写真に写っているものは何かを発問する。さらに、これはどこに立地していたのかを、絵葉書に描かれている昭和初期の絵図(図2)で確認させ、現在のスペースワールドの辺りに立地していたことを気づかせる。そ



図3 北九州工業地帯の立地条件  
『標準高等地図 初訂版』 p.93

して、八幡製鉄所は現在も有名な新日鐵という製鉄会社に発展したことを理解させる。

ではなぜ、北九州に製鉄業が立地したのかを、発問する。ここでは、**図3**のような要素を考えさせたい。この図には載ってないが、ここには当然中国への進出も考えられていたようである。

次に、『新詳地理資料 COMPLETE 2010』p.125の八幡製鉄所の変化の写真を見せる。1990年にスペースワールドは新日鐵の遊休地に建設されることとなる。それは、筑豊炭田での石炭産出量の低下ということもあるが、1970年代以降日本の鉄鋼業は、人件費の向上、オイルショックによる工業のソフト化、プラザ合意による円高などによって、明らかに日本の輸出総額における鉄鋼の輸出額の割合は低下していく。鉄鋼の生産量も、1990年代以降頭打ちとなっている。また鉄鋼というのは、「産業の米」と呼ばれるように、その他の工業製品の素材として生産される。そのため、どうしても付加価値がつけづらい。この日本に変わって、鉄鋼生産で急成長を見せたのが中国である。日本の鉄鋼業社も、中国などの安い鉄鋼に対抗するため経営の合理化をめざし、業界の再編をしてきたことを理解させる。

さらに、もう一つユニバーサルスタジオジャパンの

写真（写真3）を見せる。ここも、大阪の住友金属工業の敷地に建設された遊園地である。スペースワールドと共通するところはどこなのかを考えさせる。

これまでの一連の流れの中で、生徒は次の二つのことがわかるのではないだろうか。一つ目は、鉄鋼業は原料の近くに立地し、さらに日本の場合、原料を輸入してくるので、臨海部に立地することである。二つ目は、鉄鋼業は日本では人件費が高く、鉄鋼の付加価値も高くしづらいため日本では不利な工業となっている。

### ② 八幡製鉄所の変化

(福岡県、北九州市)  
@1985年

八幡製鉄所は、中国からの鉄鉱石と筑豊炭田の石炭を利用した日本初の官営製鉄所として、1901年に操業を開始し、日本の基幹産業をささえた。1970年、富士製鉄と八幡製鉄が合併して、当時世界最大の新日本製鐵が誕生した。写真は洞海湾に面した広大な敷地を占める新日鐵八幡製鉄所である。

⑥ 2005年

素材型産業の斜陽化に伴い、高炉を休止するなどして工場の収縮がはかられた。遊休地となった約120haの広大な跡地は、保存された高炉のほか、テーマパークの「スペースワールド」や博物館、駅、ホテル、ショッピングセンターなどが建設されるなど、再開発が進んでいる。

Link p.214



図4 八幡製鉄所の変化

『新詳地理資料 COMPLETE 2010』p.125

上述の知識をさらに発展させるため、鉄鋼業以外のセメント工業や紙・パルプ工業、繊維工業、食品工業、電子工業、自動車工業などが、どのような場所に立地するかを考え、原料指向型工業、労働力指向型工業、市場指向型工業、交通指向型工業などの分類表にまとめさせる。また、先進国において有利な工業はどの業種なのか、発展途上国において有利な工業はどの業種なのかを考えさせる。

## 4. おわりに

地理Aでは、地理Bで学習する系統地理学的内容をとり入れながら授業をすることによって授業の効率化や、内容の深化をはかることができる。本稿の場合、工業に関する系統的な学習を世界の地域の学習の前に行うことで、世界の諸地域の内容の深化をはかる試みを行った。しかし、分野によっては、最初に世界の諸地域を学習しておいて、最後にまとめとして系統的な学習を入れたほうがわかるものもあるであろう。

今後も、地理Aの内容の深化と時数の制約に悩みながら、よりよい授業をつくっていきたい。